

渡辺正巳¹: 報告—第33回日本植生史学会談話会Masami Watanabe¹: Report—The 33rd forum of the Japanese Association of Historical Botany

2011年11月5・6日開催の第26回日本植生史学会大会（弘前大学）に続き、6・7日の二日間に渡り第33回日本植生史学会談話会「下北半島猿ヶ森砂丘のヒバ埋没林」が開催された。

6日夕刻、大会終了とともに参加者・世話人19名が集合、早速レンタカーと世話人ほかのマイカーに分乗し、この日の宿舎馬門温泉富士屋ホテル（野辺地町）へと70 km 強の道のりを移動した（弘前大上條さんは、遅れて宿で合流）。移動中に日は暮れ、宿舎到着時には「真っ暗」であった（午後5時頃には既に暗くなっていた。途中で熟睡していたこともあり、西国出雲から参加した筆者は時間感覚が麻痺し、到着時に深夜？と錯覚していた）。

宿舎では、夕食と前後して世話人の箱崎さんによる巡検地のレクチャーが催された。また世話人の心配が外れ、豪華な夕食であった。一方、参加人数がやや少なかったせいか、参加者の平均年齢が上がったためか、「飲み放題」にもかかわらず、消費した酒量を少なく感じたのは、気のせいであっただろうか？

7日は朝から小雨であったが、この日の60 km の移動が始まった。途中「道の駅よこはま」での休憩を挟み、午前10時前に最初の見学地である「冷水峠」に到着した。「冷水峠」の「ヒバ林」は、天然林とされてはいるが「南部藩による伐採制限と植林の結果」とも考えられるようである（巡検案内書）。道沿いには大径の個体が観られた（図1）が、林内では同じような径を持つ個体が目立った。また、直線的に並んで生育しているような所がある反面、かなり近距離に生育している個体もある（図2）など「伐採制限と植林」



図1 冷水峠のヒバ林 (1), 道路沿いの大径木.

にうなずける面も多くあった。

午前11時前に猿ヶ森に到着する頃には朝からの小雨も



図2 冷水峠のヒバ林 (2), 林内で密生するヒバ.

上がり、観察には申し分ない天候となった。まず駐車場近くで記念撮影し、その後数分歩いて「ヒバ埋没林」に到着した。現地は一見、立ち枯れた木々が目立つクロマツ砂防林であった。しかし、立ち枯れた木々こそがヒバの埋没立木であった(図3)。埋没立木は、巡検ルートが材木沢に沿って点在していたほか、沢内にも倒木を認めることができた。箱崎ほか(未公表)によれば、生育していたヒバ湿地林が排水不良によって水没・枯死し、その後砂丘の移動によって埋まる事によって埋没林が成立し、砂丘の活動性が低下したことで砂丘の開析が進み、埋没樹木が姿を現したとされる。また今回の巡検では、ヒバ(埋没)林の生育面を含む泥炭(腐植質粘土)層中に、10世紀以降の降灰した白頭山-

苦小牧テフラ(B-Tm)が狭在する様子も観察できた(図4)。

途中で雨に降られたものの、観察を無事に終え、駐車場で昼食となった。その後、午後2時ごろに解散となった。帰り道では、再度「道の駅よこはま」に立ち寄り、お土産を買い込んだ方々もあった。今回の巡検では、移動距離が往復300km近くになった。後部座席で熟睡できた参加者(筆者)には快適な移動時間であったが、世話人を中心としたドライバーの方々にとっては苦痛であったに違いない。改めて、世話人およびドライバーの方々、ありがとうございました。

(¹ 〒690-0822 島根県松江市下東川津町 文化財調査コンサルタント株式会社)



図3 猿ヶ森埋没林(1)、ヒバの埋没立木と産状。



図4 猿ヶ森埋没林(2)、埋没林の生育層準とB-Tmの検出状況。